

心態詞 *ja* の含意に関する試論 — „Du hast *ja* vielleicht Recht“ の解釈について —

筒 井 友 弥

〈Summary〉

In this paper, I discuss the German modal particle *ja*. Especially I direct the attention toward the cooccurrence of *ja* and the modal adverb *vielleicht* illustrated by the sentence “Du hast *ja vielleicht* Recht”.

Whereas the modal particle *ja* presupposes a factivity (the known) of a proposition, the modal adverb *vielleicht* indicates a possibility (the unknown) of a fact. This is actually a problem, because in this cooccurrence the meaning of the two words will be interpreted on the same level.

It is assumed that the modal particle *ja* indicates the speaker’s presupposition of a certain fact being already known to the listener. There is, however, an example, where the known cannot be presupposed. In this article, I will try to explain the implicated meaning and function of *ja* and will provide a possible solution for the problem of the relevant cooccurrence.

1. は じ め に¹⁾

心態詞研究の発展に伴い、今後は「心態詞の組み合わせに研究の比重を移してほしい」（岩崎 2012）という背景のもと、本稿では、（心態詞同士の結合（Kombination）ではないものの）平叙文における心態詞 *ja* と語法詞 *vielleicht* の共起（Kookurenz）に注目する。この共起文では、命題の事実性（既知性）を表明する *ja* の機能と、事実の可能性（未知性）を表明する *vielleicht* の機能において、本来、いわば意味的な相殺を伴い使用に齟齬をきたすと考えられる。しかし、実際には、例えば (1) のような共起文は、インターネットサイトの Google でも数多く検索され、また、日常会話でも支障なく用いられる。

(1) Du hast *ja vielleicht* Recht. (君は正しいかもね)²⁾

そこで本稿では、この現象に取り組むうえで、下記 (2) のような会話例からうかがえる *ja* の既知性（共有知識）の問題に仮説的な解釈を与え、その解釈を通して、*ja* と *vielleicht* の共起に見られる問題に可能な解決案を提示することが目的である。

- (2) 〈互いに見知らぬ相手である A と B が、市電に乗り込んで〉

A: Würden Sie bitte weiter durchgehen? (奥に進んでいただけませんか)

B: Nein, ich muss ja nächste Station schon aussteigen. (Rinas 2007: 205) (〈〉は筆者による)
(いえ、もう次の駅で降りないといけないので)

この (2) では、A は B が次の駅で下車しなければならないことを知る由もないため、話し手 B の発話を下記 (3) のように解釈することはできない。

- (3) * Der Hörer (=A) weiß, dass der Sprecher (=B) an der nächsten Station schon aussteigen muss.

(聞き手 (= A) は、話し手 (= B) がすでに次の駅で降りなければならないことを知っている)

本稿では、まず次節で心態詞 *ja* と話法詞 *vielleicht* の機能を概観する。続いて第 3 節では、当該の共起文の意味的な構造に関する先行研究を紹介し、その見解の問題点を指摘する。そして第 4 節では、その問題点に対する可能な解決案を提示する。その際、本稿では、心態詞 *ja* の表す既知性が語彙レベルでなく含意レベルのものであることに注目し、その含意のあり方について筆者による考えを示す。最終節はまとめとする。

2. 心態詞 *ja* と話法詞 *vielleicht*

心態詞研究で最も著名な文献の一つである Helbig (1988) では、心態詞の *ja* を 9 つのタイプに分類し、そのうち平叙文に現れる *ja* について (4a) のように述べている。また、Langenscheidt の独辞書でも、平叙文における心態詞 *ja* のいわゆる「既知 (性)」に言及されている (= (4b))。続けて (5a-d) に、心態詞 *ja* の例を挙げる。

- (4) a. [ja] signalisiert den geäußerten Sachverhalt als dem Sprecher und dem Hörer bekannt (= wie wir beide wissen) oder gar als evident bzw. allgemeingültig, bezieht sich auf gemeinsames Vorwissen, setzt Konsens (eine gemeinsame Kommunikationsbasis) voraus und/oder appelliert an Übereinstimmung. Sprecher setzt den Sachverhalt als bekannt voraus, möchte sich jedoch vergewissern, ob er gegenwärtig ist (ruft ihn gleichsam ins Gedächtnis zurück). (Helbig³1994 (1988): 165) (下線は筆者による)

([ja] は、発話された事態を、話し手と聞き手にとって既知 (=我々両者が知っているとおりの)、またはそれどころか自明ないし普遍妥当的であるとして表し、共通の前知識と関係し、同意 (共通のコミュニケーション基盤) を前提とし、かつ／または合意を訴える。

話し手は、事態が既知であることを前提としながら、その事態が聞き手の意識の中にあるかどうかを確認したいと思っている（いわばその事態を想起させる）

- b. [ja] in Aussagesätzen verwendet, um auszudrücken, dass etwas bekannt ist, um daran zu erinnern oder um auszudrücken, dass man Zustimmung erwartet. (LGDaF 2003)

（下線は筆者による）

（平叙文における [ja] は、何かが既知であると表現するため、あるいはそのことを想起させるため、または同意が期待されていることを表すために使用される）

- (5) a. Wir wissen *ja*, daß er nächste Woche operiert wird. (Helbig³1994: 165)

（私たちは、彼が来週手術を受けることを知っていますよね）

- b. Die Prüfung ist *ja* bald vorüber. (Wir wissen es alle.) (ibid.)

（試験はもうすぐ終わるね）（（私たち全員がそのことを知っている））

- c. Köln war *ja* schon im Mittelalter eine blühende Stadt. (Wir sind uns darin einig / wir stimmen darin überein, dass Köln schon im Mittelalter eine blühende Stadt war.) (Rinas 2007: 207)

（ケルンは、中世においてすでに栄えた町でしたね）（（我々はその点で同意している／ケルンが、中世においてすでに栄えた町であったことに、我々は意見が一致している））

（斜体は筆者による）

(5a, b) では、話し手と聞き手間の共有知識（既知）が問題となっており、(5c) は、(4a, b) でも挙げられているとおり、同意（共通のコミュニケーション基盤）を前提としていること、あるいは聞き手に同意を期待していることを表している。以上から、平叙文における心動詞 *ja* の意味的な機能は、話し手・聞き手間で既知として共有する知識の確認、同意の前提あるいは期待であり、*ja* は命題の事実性に関する表明、言い換えれば高い蓋然性を表す言語手段の一つであると言える。

一方、語法詞の意味機能を包括的にまとめた Helbig/Helbig (1993) によれば、*vielleicht* は „Hypothesenindikator“（仮説標識（筆者による訳））と称され、その機能については (6) のように述べられる。

- (6) Sprecher signalisiert unsichere Vermutung hinsichtlich der Realität/Realisierbarkeit von p. Zweifel sind nicht ausgeschlossen, aber die Faktizität von p wird immerhin für möglich gehalten (Es ist vielleicht so, daß p. / Für Sprecher gilt: ebensogut p wie nicht p) (Helbig/Helbig²1993: 270)

（下線は筆者による）

（話し手は、命題 p の現実性／実現可能性に関する不確かな推測を表す。疑いは拭われ

ていないものの、少なくとも *p* の事実性は可能なものであるとみなされる (*p* ということ
はありうる／話し手にとって、*p* であることと *p* でないことは等価とみなされる))

- (7) a. Wir gehen heute *vielleicht* noch ins Kino. (Helbig/Helbig²1993: 271)
(私たちは今日まだ映画に行けるかも)
- b. Diese Kiste ist *vielleicht* schwer. (岡本・吉田 2013: 249) 〈大文字は強勢の意〉
(この箱はひょっとしたら重い)
- c. Jiji: *Vielleicht* hat sich hier aber auch schon ,ne andere Hexe eingenistet.
Kiki: *Vielleicht* auch nicht.
(ジジ: ここにはもう他の魔女がいるかもしれないよ。
キキ: いないかもしれないわ) (映画「魔女の宅急便 (ドイツ語訳版)」より)

とりわけ (7c) の例からもわかるように、話法詞 *vielleicht* の表す事実の可能性は 50%³⁾ であり、(6) に挙げたとおり、平叙文における話法詞 *vielleicht* の意味機能は、命題のあり方や実現に対する話し手の不確実な推測・想定であると言える。換言すると、*vielleicht* は、事実の可能性に関する表明として比較的低い蓋然性を表す言語手段の一つである。

3. *ja* と *vielleicht* の共起文における問題点

3.1. 先行研究

前節で示した *ja* と *vielleicht* それぞれの機能をふまえ、その共起文に注目した井口 (2010)⁴⁾ では、下記 (8) のように一つの問題点が指摘される。

- (8) *ja* によって話し手が命題の事実性 (または既知性) を主張し、*vielleicht* はその逆に命題の事実性を単なる可能性としてしか示さないということ [...] が正しいならば、[...] この二つの語が同じレベルで作用していると矛盾を生じることになる。(井口 2010: 51ff.)

この (8) の記述を、例えば先の (1) の例に照らして解釈すると、下記 (9) となり確かに矛盾である。

- (9) Du hast *ja vielleicht* Recht. (= (1)) (君は正しいかもね)
- ²² S hält *p* für faktisch und gleichzeitig für möglich, *p* = der Hörer hat Recht
(S は *p* を、事実であり、同時に事実でありうるものとしてみなす、*p* = 聞き手が正しい)

ここで先に述べておくが、前節で紹介した平叙文における心態詞 *ja* と話法詞 *vielleicht* それぞれの意味機能に従う限り、筆者は、(8)の問題提起自体に異論はない。ただし、次節以降で述べるが、両者が「同じく発話行為レベルで作用している」と捉えることに対して疑問を呈する。

井口 (2010) では、この問題の解決策として、まず心態詞 *ja* の既知性が再検討される。井口 (2010) は、心態詞 *ja* の機能として、一概に「既知」といっても、実際に聞き手に既知か否かは不可視であるため、少なくとも「聞き手によって命題内容が想定されうることを表す」と仮定する。

次に、*vielleicht* については、下記 (10a) に示すような心態詞としての意味（当該の事態の形状があり得ないという可能性の低さ）、あるいは (10b) のような程度詞としての *vielleicht* の意味（当該の数値に自信がないという可能性の低さ）に注目し、「話法詞、心態詞、Gradpartikel としての *vielleicht* の機能の根本には『ありえなさ』のようなものが見てとれる」（井口 2010: 53）と述べる。

- (10) a. Der hat *vielleicht* einen Bart! (井口 2010: 52) (そいつはなんてひげを生やしているんだ)
- b. Er hat *vielleicht* 20 DM verspielt. (ibid.) (彼は 20 マルクほどすってしまった)
- c. Könnten Sie das *vielleicht* für mich erledigen? (ibid.: 53)
- (ひょっとして私のためにそれを済ませていただけませんか)
- d. Haben Sie *vielleicht* Feuer? (ibid.) (ひょっとして火をお持ちですか)

そして、(10c, d) のような依頼や要求で *vielleicht* が用いられた文は、「否定的な答えを予想するからこそ、その分控えめな方向に働き、依頼、要求に使いやすいということになるのだろう」（ibid.）と解釈される。「話し手は『そういうことはないと思うが』という否定的な立場を表明することにより、自分の発話内容に慎重であることを表明し、それによって場合によっては、聞き手に対する配慮を示していると考えられることができる」（井口 2010: 54）。

こうした分析の結果、(1) のような文 (Du hast ja vielleicht Recht.) における *vielleicht* の意味的な機能を、「話し手の発話行為自体に対する控えめな態度の表現」とする。そして、*ja* と *vielleicht* の共起文における *vielleicht* の機能は、命題に対する事実性の判断というより、命題の表現自体に対する「躊躇」であると分析される。その結果、(1) の文の解釈は、„Du hast Recht.“ と直接相手に伝えることに躊躇した話し手が、「当該命題を相手が想定しているであろうという配慮 (= *ja*) をしながらも、さらにそれを控え目に表現 (= *vielleicht*) している」ということになる (cf. ibid.)。とはいえ、この分析には、「ありえなさ」から生じる話し手の控えめな態度を表す *vielleicht* の機能が、いかにして命題内容を表現すること自体の「躊躇」につながるのか、また、当該命題を相手が想定しているであろうとみなす心態詞 *ja* による「配慮」と、発話内容に慎重であることを表明する話法詞 *vielleicht* の表す「配慮」が、どの程度異なる機能として扱われるべきかなど、まだ不明な点も残されている。これらの疑問をふまえ、筆者は次節

以降で、*ja* と *vielleicht* の両者が同じく発話行為レベルで作用していると捉えることに異論を唱え、一つの試みとして第4節でその問題の解決策を探る。

3.2. 井口 (2010) による分析の問題点 — 作用域

前節末に挙げた井口 (2010) による文解釈には二つの問題点が観察される。第一に、意味的な作用域が考慮されていない点である。例えば、アスペクト、時制、モダリティの語順の意味的な階層性を論じた Cinque (1999) を参照し、心態詞 *ja* の配語に言及した Grotz (2005) によれば、心態詞 *ja* は Mood_{speech act} の位置 (英: *frankly* の位置) に基底生成され、話法詞 *vielleicht* (英: *perhaps* の位置) を含みこんだ命題全体を意味的な作用域にと考えられる。

(11) *The universal hierarchy of clausal functional projections*

[*frankly* Mood_{speech act} [*fortunately* Mood_{evaluative} [*allegedly* Mood_{evidential} [*probably* Mood_{epistemic} [*once* T (Past) [*then* T (Future) [*perhaps* Mood_{irrealis} [*necessarily* Mod_{necessity} [*possibly* Mod_{possibility} [...]] (Grotz 2005: 77ff., cf. Cinque 1999: 106)

中右 (1994: 54) でも、「S モダリティ [= 話法詞が表すモダリティ] は全体命題 PROP^d を作用域とするのに対し、D モダリティ [= 心態詞が表すモダリティ] は構文意味の全体、つまり S モダリティ + 全体命題を作用域とする」([] は筆者による) と述べられる。そして、以上の観点は表層における文の語順にも反映すると考えられ、7名のネイティブによれば、(1) の語順を替えた (12) は非文あるいはほとんど認容されない文として判断されることがわかった。

(12) */?? Du hast *vielleicht ja* Recht. (private Kommunikation mit 7 Muttersprachlern)

こうした作用域をふまえると、本来 (1) の文の意味解釈は、「話し手が『聞き手が正しい』という命題を 50% (以下) の可能性として捉えていることを、聞き手が知っている、あるいは知りうると想定されると話し手が信じている」となり、この際の *ja* の機能を、少なくとも井口の主張する「相手が想定しているであろうという配慮」とみなすには少し無理があるように思われる。

3.3. 井口 (2010) による分析の問題点 — 発話行為オペレータ修飾語

さらに、もう一つの問題点として、先に述べた井口 (2010) の *vielleicht* に関する機能「話し手の発話行為自体に対する控え目な態度の表現」を検討する。この記述は、話法詞 *vielleicht* が、発話行為オペレータ修飾語であることを示唆するものである。発話行為オペレータ修飾語とは、例えば心態詞 *ja* がそれに相当し、Zimmermann (2004) の分析によれば、*ja* は聞き手との共有知識の中に付加価値としての意味要素 α を追加するとされ、発話行為オペレータ「ASSERT」に対し、「聞き手との共有知識の構築」という態度 α を付与することで「主張」の度合いを強調す

と考えられる（下記（13）を参照）。

- (13) a. Hein ist *ja* auf See. (Hein は海に出ているよ)

a'. < *ja* + ASSERT (Hein ist auf See) > (Zimmermann 2004: 284)

一方, Zimmermann (2004) による話法詞 *wohl* の分析を参照して, *wohl* の代わりに *vielleicht* を置いた (14a-d) で示すとおり, *wohl* や *vielleicht* のような認識的モダリティを表す話法詞は, 文ムードを示す Force の主要部に基底生成されて, 文ムードを修飾する語であると考えられている。つまり, この点で発話行為オペレータ修飾語 (例えば心態詞 *ja*) と区別され, 同時にこのことは, (14e) に示すように話法詞 *vielleicht* の意味が, 心態詞 *ja* の意味的な作用域に入ることとを裏付ける。

- (14) a. Hein ist *vielleicht* auf See.

b. Sprecher vermutet, dass Hein auf See ist.

c. *vielleicht* (*p*) = VERMUT (*Sprecher*, *p*) *Sprecher* = epistemische Verankerung

d. [_{ForceP} *vielleicht*_i decl_{Sprecher} [_{TopP} Hein [_{FinP} ist [_{VP} t_i . . .]]]]⁵⁾

↖
Spezifikator-Kopf-Kongruenz

e. *ja* + ASSERT (VERMUT (*sprecher*, Hein ist auf See)) (cf. Zimmermann 2004: 273, 284)

そのうえで, (1) の共起文における *vielleicht* が, 同じ文意味を表して下記 (15) のように文頭域 (= 前域) でも使用が容認されることに基づき, その文肢性から, (1) における *vielleicht* が心態詞ではなく話法詞としての用法であると決定づけられる。仮に心態詞としての使用である場合, 情報構造の観点 (= 話題化不可) に基づく「心態詞は前域に置かれない」という特性にそぐわないためである。

- (15) *Vielleicht* hast du ja Recht. (= Du hast *ja vielleicht* Recht.)

以上の観点から, *vielleicht* の意味的な機能を「発話行為自体に対する控え目な態度の表現」とする井口 (2010) の主張には異論の余地がある。

4. 解 決 案

4.1. 心態詞 *ja* の既知性と含意

3.1. で述べたとおり, 筆者は, 井口 (2010) の問題提起自体には全く異論はない。ただし, 3.2. と 3.3. で指摘したとおり, *ja* と *vielleicht* の両者を同じく発話行為レベルで捉えるならば, 文

解釈において問題が生じると言わざるを得ない。そこで、本節では *ja* の既知性に焦点を絞り、平叙文における心齋詞 *ja* の意味機能について再検討する。その際、下記 (16) に再録する第 1 節で紹介した会話例に注目する。

(16) 〈互いに見知らぬ相手である A と B が、市電に乗り込んで〉

A: Würden Sie bitte weiter durchgehen? (奥に進んでいただけませんか)

B: Nein, ich muss ja nächste Station schon aussteigen. (Rinas 2007: 205)

(いえ、もう次の駅で降りないといけないので)

ここでは、A は B が次の駅で下車しなければならないことを知る由もないにもかかわらず、(16B) の発話が決して非文ではないことに従い、この際の *ja* の意味をいかに解釈するかが問題となる。そこで本稿では、心齋詞 *ja* の表す既知性が語彙レベルのものでなく含意レベルの既知性であることに基づき⁶⁾、その含意の「あり方」を考察する。

例えば Rinas (2007) は、(16B) における *ja* を „Indikator für Wissensvorsprung“ (知識のリードを表す標識 (筆者による訳)) と称して (17) のような見解を示す。

(17) *ja* als Indikator für Wissensvorsprung

Der Sprecher besitzt gegenüber dem Hörer einen Wissensvorsprung, der ihn zur Behauptung von S [= Sachverhalt] legitimiert.

Paraphrase: ‚Sie müssen wissen, dass S.‘

(Der Sachverhalt stellt für den Hörer eine neue Information dar.) (Rinas 2007: 208)

([] は筆者による)

(知識のリードを表す標識としての *ja*)

(話し手は、聞き手に対し、S [= 事態] を主張する資格が認められる知識の優位性を有する)

(言い換え: ‚あなたは S ということを知っていなければならない‘)

((その事態は、聞き手にとって新情報である))

(16) の話し手 B にとって、自らがどの駅で下車するかは、当然自分自身が一番把握しており、この時点で、話し手 B は聞き手 A に対して「知識の優位性」を持っている。つまり、聞き手に対して知識をリードしている。そして、Rinas (2007: 208) によれば、心齋詞 *ja* は、そのような知識のリードを示すだけでなく、その知識の優位性を表すことで論拠や叙述を行うきっかけを意味する。そのため、この場合の *ja* は、‚Sie müssen wissen, dass S.‘ (‘あなたは S ということを知っていなければならない’) と言い換えられるとされる。そこで、下記 (18a, b) のような例文をてがかりに、この論拠という点に注目して心齋詞 *ja* の含意のあり方を探してみたい。

- (18) a. Sabeth in meinem Arm, während wir auf den Sonnenaufgang warten, schlottert. Vor Sonnenaufgang ist es ja am kältesten. (Rinas 2007: 206)

(日の出を待つ間、私の腕のなかの Sabeth は震えている。日の出前が最も寒いからだ)

- b. Im Winter schneit es ja viel, kann man gut Ski laufen.

(冬には雪が多く降る。だから存分にスキーができる)

(18a) では、*ja* が用いられた文が、先行する文の内容の「論拠／理由づけ」として機能していると考えられる。また、(18b) のように論拠の対象となる文が後続する場合もある。ただし、Rinas (2007) でも指摘されることであるが、一方で、例えば (18a) における *ja* を削除した場合 (= (19a)), 確かに *ja* を伴う場合と比べて論拠の確実性が劣るものの、他方で (19b) のように、語彙的に既知を表す副詞をあてがうことでも、当該文は十分に論拠として機能しうる。

- (19) a. ² Sabeth in meinem Arm, während wir auf den Sonnenaufgang warten, schlottert. Vor Sonnenaufgang ist es am kältesten. (Rinas 2007: 206)

(日の出を待つ間、私の腕のなかの Sabeth は震えている。日の出前が最も寒いのだ)

- b. Sabeth in meinem Arm, während wir auf den Sonnenaufgang warten, schlottert. Vor Sonnenaufgang ist es bekanntlich am kältesten. (ibid.)

(日の出を待つ間、私の腕のなかの Sabeth は震えている。知ってのとおり、日の出前が最も寒いからだ)

このことは、論拠／理由づけの意味が、本来、Grice の協調の原理 (+ 関係の公理) に依るものであり、心齋詞 *ja* 独自の表す含意ではないことを示している。では、(18a, b) のような文における心齋詞 *ja* は、何を含意していると考えられるだろうか。筆者の見解は (20) である。

- (20) 「発話命題から導かれる明示的／非明示的な含意を共有知識 (既知) として了解せよ」という含意

ここで「～として了解せよ」としているのは、第一に、先の (17) における「Paraphrase: ‚Sie müssen wissen, dass S.‘ (言い換え: ‚あなたは S ということを知っていなければならない) 」を参照し、第二に、心齋詞がもっぱら会話 (対話) で頻出することをふまえ、聞き手に対する働きかけとして筆者なりのことばで言い換えたものである。また、同じく (17) における「Der Sachverhalt stellt für den Hörer eine neue Information dar. (その事態は、聞き手にとって新情報である)」という部分は、(20) では「発話命題から導かれる明示的／非明示的な含意」という考え方に置き換えている。*ja* を伴う発話の命題が、それ自体で新情報であるというより、その発話により話し手が何を意図しているかを探ることが、聞き手にとってある種の新情報であると考えたからである。

3.3. で少し触れたが, Zimmermann (2004) によれば, 心態詞 *ja* は発話行為オペレータ修飾語と呼ばれる。その分析によれば, 平叙文における *ja* は聞き手との共有知識の中に付加価値としての意味要素 α を追加するとされ, 発話行為オペレータ「ASSERT」に対し, 「聞き手との共有知識の構築」という態度 α を付与することで「主張」の度合いを強調すると考えられている。(18a) の例で言えば, 「日の出前が最も寒い」という「主張」の度合いを強調しているわけであるが, このとき聞き手は, コンテキストや一般常識に従い, 発話命題から生じうる含意のうちで, 先行する文との関連性に言及して最適な意味解釈を行うと考えられる。その際, 例えば「寒い」という気象的な状況から生じる一般知識としての含意(の一つ)に, 「人体が震える」という身体的な現象があり, *ja* はここで, (少なくとも) その含意を互いの共有知識として了解するよう促す役目を担っているのではないか。そして, そのうえで聞き手は, 「日の出前が最も寒い」という文(命題)が, 「日の出を待つ間, 私の腕のなかの Sabeth は震えている」という文(命題)の論拠であるという解釈を行うのではないかと考える。つまり, Rinas (2007) の指摘どおり, 決して *ja* 自体に論拠の意味(含意)が付随しているわけではなく, あくまでも *ja* は, 自らの発話行為「(平叙文であれば) 主張」を強調するために用いられており, そしてその強調に際して, 聞き手に, 自らの(発話) 命題から導かれる明示的/非明示的な含意を, 互いの共有知識(既知)として了解せよと含意すると考える。その結果, 聞き手の解釈過程を経て, あくまで副次的に確認や論拠の意味が導かれることになるのではないだろうか。例えば, 一文だけでは話し手と聞き手間の共有知識の確認につながる (21a) = (5b) や (21b) の(発話) 文であっても, なんらかの先行あるいは後続する文をふまえれば, (22a, b) のように, それぞれの当該文が先行あるいは後続する文の論拠となる。

(21) a. Die Prüfung ist *ja* bald vorüber. (= (5b)) (試験はもうすぐ終わるね)

b. Er wird *ja* nächste Woche operiert. (彼は来週手術を受けますね)

(22) a. Fahren wir übernächste Woche nach Kyoto! Die Prüfung ist *ja* bald vorüber.

(再来週, 京都に行こうよ。もうすぐ試験が終わるからね)

b. Er wird *ja* nächste Woche operiert. Er kann bestimmt nicht am nächsten Spiel teilnehmen.

(彼は来週手術を受けますからね。彼はきっと次の試合には出られません)

以上をふまえ, (23) = (16) の例で同様に考えてみる。

(23) 〈互いに見知らぬ相手である A と B が, 市電に乗り込んで〉

A: Würden Sie bitte weiter durchgehen? (奥に進んでいただけませんか)

B: Nein, ich muss *ja* nächste Station schon aussteigen.

(いえ, もう次の駅で降りないといけないので)

「次の駅で降りなければならない」という B の発話内容は、(一般常識として、次の駅で下車することは、車両の奥に進まないことの理由になりうるため) B が車両の奥へ進まないこと、つまり A の依頼に対する断りを意味している。この際、話し手は、その一般常識に照らして生じる「車両の奥に進まない」という含意を、心齋詞 *ja* を用いることで聞き手に共有知識として了解せよと促し、その結果、聞き手は、*ja* を伴う B の発話が、その先行発話である „Nein“ (いいえ)、つまり「断り」の論拠であると解釈することとなる。

4.2. „Du hast *ja* vielleicht Recht“ の解釈

最後に、(24) = (1) の可能な解釈を試みる。

(24) Du hast *ja vielleicht* Recht. (君は正しいかもね)

まず、当該の発話文では、その発話の前に、会話の相手によるなんらかの考えや意見が提示されていると想定される。その主張に対して、話し手は「正しい／正しくない」という判断を下していると考えられるからである。そして、話法詞 *vielleicht* を用いることで、話し手は自らの発話命題 (Der Hörer hat Recht) の蓋然性を表すことにより、(程度には差があると考えられるが) 聞き手の主張に対して納得していない旨を含意する。つまり、下記 (25a, b) の比較で示すとおり、*vielleicht* を伴う発話 (主張) は、決して 100% の確証を示していないことを表現しており、そのことが、特に今回のような発話命題 (Der Hörer hat Recht) においては、相手の意見／主張の内容に納得していない旨の含意につながる。

(25) a. Du hast Recht. = 100% sicher, ganz überzeugt

(君は正しい = 100% の確証, 完全に納得している)

b. Du hast *vielleicht* Recht. = nicht 100% sicher, nicht ganz überzeugt

(君は正しいかもしれない = 100% ではない確証, 完全には納得していない)

この点は、*vielleicht* 単独を伴う文でも (= (26a)), 心齋詞 *ja* との共起文であっても (= (26b)), 明示的あるいは潜在的に、接続詞 *aber* (しかし) を伴う発話が後続することからもうかがえる⁷⁾。

(26) a. Du hast *vielleicht* Recht, (aber...)

b. Du hast *ja vielleicht* Recht, (aber...)

以上をふまえて (24) の文を解釈すると、「話し手は話法詞 *vielleicht* を伴う発話により、発話命題 (Der Hörer hat Recht) の蓋然性を主観的に表し、それにより聞き手の主張に対して納得し

ていないことを含意する。さらに話し手は、心態詞 *ja* を用いることで、聞き手にその含意を共有知識として了解せよと促す」と分析できる。こうした含意のいわゆる入れ子構造は、3.2. と 3.3. で述べた意味的な作用域をふまえれば妥当であろう。そして、当該の文に、仮に *aber* を伴う明示的な反論が後続する場合、聞き手は、『話し手が自分（＝聞き手）の主張に納得していない』ということ話を話し手との共有知識とすることで、『（それゆえ）話し手は、後続の *aber* を伴う文で反論している（反論を行うための論拠）』と解釈するのではないか。この際心態詞 *ja* は、『聞き手の主張が正しい』という主張ではなく、『正しいかもしれない』という主張を強調するために用いられており、このことが、聞き手に含意の解釈を容易にさせると考えられる。

5. ま と め

本稿では、平叙文における心態詞 *ja* と話法詞 *vielleicht* の共起 (Kookurenz) に注目し、先行研究に従って、この共起文では、命題の事実性 (既知性) を表明する *ja* の機能と、事実の可能性 (未知性) を表明する *vielleicht* の機能において問題が生じることを取り上げた。問題となるのは、(27) のような例文である。

(27) Du hast *ja vielleicht* Recht. (君は正しいかもね)

この問題に取り組むうえで、筆者が特に注目したのは (28) のような会話例である。

(28) 〈互いに見知らぬ相手である A と B が、市電に乗り込んで〉

A: Würden Sie bitte weiter durchgehen? (奥に進んでいただけませんか)

B: Nein, ich muss *ja* nächste Station schon aussteigen. (Rinas 2007: 205)

(いえ、もう次の駅で降りないといけないので)

この例では、本来 *ja* に前提とされるはずの既知性 (共有知識) が認められない。そこで筆者は、心態詞 *ja* の表す既知性が語彙レベルのものでなく含意レベルのものである点に基づき、その含意の「あり方」を考察することで、最終的に、(27) の文に可能な解釈を与えようと試みた。

結論として、まず、Rinas (2007) における „*ja* als Indikator für Wissensvorsprung“ (知識のリードを表す標識としての *ja*) という考え方を参照し、心態詞 *ja* の含意を (29) のように定めた。

(29) 「発話命題から導かれる明示的／非明示的な含意を共有知識 (既知) として了解せよ」という含意

ここでは、心態詞 *ja* の既知性を踏襲したうえで、その既知の対象を、発話命題から導かれる明示的／非明示的な含意としたことが、筆者が最も主張したいことである。そして、この見解に基づいて、4.2. で、(27) の文の可能な解釈を述べた。また、筆者は、心態詞がもっぱら会話（対話）で頻出することをふまえ、心態詞 *ja* の表す含意は、聞き手に対する働きかけ（「～として了解せよ」という促し）であると考えた。この際、心態詞 *ja* は、発話行為レベルで自らの「主張」の度合いを強調する役目を担うに留まる。そのように考えることで、これまで *ja* の意味機能として議論されてきた「確認」、「同意」、「期待」、「論拠」、「反論」、「脅し」などは、あくまで聞き手側の推論から導かれるものであることを示唆した。

Hentschel/Weydt (1990) でも述べられることであるが、本稿のような部分的な考察では、「個別的な事例の記述であればあるほど、意味の細部は確認できるが、一方でその事例以外で用いられる場合との関連性を明らかにしにくくなる」(ibid.: 300) ことは言を俟たず、(29) については、本稿では仮説の域を出ない。そのため、今後の課題として、さらに (30) の話法詞 *vielleicht* を伴わない文、(31a, b) のような命令文や (32a, b) のような感嘆文における *ja*、あるいは副文内に義務的に現れる *ja* (= (33a)), または因果接続詞と共起する場合の心態詞 *ja* (= (33b)) に対する整合性のある分析が問われる。

(30) Du hast *ja* Recht, aber ... (君は正しいね。でも…)

(31) a. Arbeite *ja* fleißig! (Helbig³1994: 168) (しっかり働け!)

b. Lies *ja* das Buch durch! (ibid.) (その本を最後まで読みなさい!)

(32) a. DER hat *ja* einen Bart! (Rinas 2006: 261) (そいつには髭が生えてるじゃないか!)

b. Die Suppe ist *ja* heiß! (このスープは熱いんだな!) (三瓶 1997: 17)

(33) a. Dass du *ja* gleich nach Hause kommst! (すぐに帰宅すること!)

b. Ich kann nicht kommen, weil ich *ja* morgen nach Berlin fahren muss. (Rinas 2006: 146)

(明日ベルリンに行かないといけないので私は来られません)

注

1) 本稿は、京都ドイツ語学研究会第 84 回例会 (2014 年 9 月 20 日, キャンパスプラザ京都) での口頭発表「心態詞 *ja* に関する一考察 — 話法詞 *vielleicht* との共起をてがかりに —」に基づき、その内容に修正を施したものである。

2) 本来、心態詞に訳語をつけることは望まれず (cf. 岩崎 1986: 35; 1998: xixff.), 筆者もこの点に同意するが、ここでは、心態詞の表すニュアンスを単に紹介する上で、あえて訳を提示するこ

とにする（以下、本稿において邦訳をつけた箇所は、いずれも同様の理由に基づく）。ただし、「日本語にドイツ語の心懸詞に対してはほぼ1対1の対応を示す語類が存在しない」（岩崎 1986: 37）ことを強調しておく。

- 3) Gerstenkorn (1976: 340) に依る。実際には 30% 程度とも考えられる。
- 4) 管見では、当該論文以外に、平叙文における心懸詞 *ja* と語法詞 *vielleicht* の共起を扱った文献は見当たらない。感嘆文における共起については Rinas (2006) を参照されたい。
- 5) ForceP, TopP, FocP, FinP といった機能範疇は、「分離 CP 仮説」(split CP hypothesis) として Rizzi (1997: 297) により提案されたものである。その際、「Force」という概念は、*declarative*, *interrogative*, *imperative*, *exclamative* と同様に „sentential mood/sentential force“ を指し、„illocutionary force“ のことではない。(cf. Coniglio 2011: 70)
- 6) 心懸詞 *ja* の表す既知性については、次の岡本 (2010: 55) の例文 (I) における論法 (II) を参照する ((I) の和訳は筆者による)。以下から、心懸詞 *ja* の表す既知性は、語彙的なものではなく含意レベルのものであるとわかる：
 - (I) a. Sie wissen *ja*, daß er nächste Woche operiert wird. (岡本 2010: 54)
(ja + 彼らは、彼が来週手術を受けることを知っている)
 - b. Er wird *ja* nächste Woche operiert. (ibid.)
(ja + 彼は来週手術を受ける)
 - c. Sie wissen, daß er nächste Woche operiert wird. (ibid.)
(彼らは、彼が来週手術を受けることを知っている)
 - (II) a. 前提: (I a) と (I b) の意味は等しい。
 - b. 主張-1: *ja* は、「聞き手にとって既知である」 (= A) を意味する。
 - c. 主張-2: A は、(I a) のマトリックス文 *Sie wissen* に含まれている。
 - d. 主張-3: A は、(I b) の文に *ja* として含まれている。
 - e. 帰結-1: 主張-1 と主張-2 により、(I b) と (I c) の意味は等しい。
 - f. 帰結-2: 前提と帰結-1 により、(I a) と (I c) の意味は等しい。
 - g. 帰結-3: (I a) と (I c) の意味が同じであると主張するためには、(I a) の *ja* の意味が「空」(\emptyset) であると主張しなければならない。これは主張-1 と矛盾する。(cf. 岡本 2010: 55)
- 7) インターネットサイト Google の「フレーズ検索」では、「Du hast vielleicht Recht.」という文は 3,680 件、そのうち „Du hast vielleicht Recht, aber [...]“ は 737 件、また „Du hast ja vielleicht Recht.「という文は 641 件、そのうち „Du hast ja vielleicht Recht, aber [...]“ は約半数の 325 件が検索された (2016 年 9 月 24 日時点の検索結果)。

参考文献

- Cinque, G. *Adverbs and Functional Heads. A Cross-Linguistic Perspective*. New York/Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Coniglio, M. “Deutsche Modalpartikeln: Ein Vorschlag zu ihrer syntaktischen Analyse”, In: Thüne, E.-M./Ortu, F. (Hrsg.) *Gesprochene Sprache – Partikeln. Deutsche Sprachwissenschaft international*. Band 1: Peter lang, 2007. pp. 103–113.
- Gerstenkorn, A. “Das „Modal“-System im heutigen Deutsch”, In: *Münchener Germanistische Beiträge*. 16, 1976.
- Grosz, P. ‘*dn*’ in *Viennese German. The Syntax of a Clitic Version of the Discourse Particle ‘denn’*. University of Vienna (MA thesis), 2005.

- Helbig, G. *Lexikon deutscher Partikeln*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie, ³1994 (1988).
- Helbig, G./Helbig, A. *Lexikon deutscher Modalwörter*. Leipzig: Verlag Enzyklopädie, ²1993.
- Hentschel, E./Weydt, H. *Handbuch der deutschen Grammatik*. Berlin/New York: Walter de Gruyter. 1990. (邦訳：西本美彦・高田博行・河崎靖 (共著)『ハンドブック 現代ドイツ文法の解説』同友社 1995.)
- Ickler, T. “Zur Bedeutung der sogenannten „Modalpartikeln“, In: *Sprachwissenschaft*. 19, 1994. pp. 374-404.
- 井口靖「ドイツ語話法詞と心態詞の多機能性について：Vielleicht haben Sie ja Recht. の例に関して」(『人文論叢：三重大学人文学部文化学科研究紀要』27 2010. pp. 47-58.)
- 岩崎英二郎「独和辞典と心態詞」(『エネルギー』第12号 1986. pp. 34-39)
- 岩崎英二郎『*Deutsch-Japanisches Wörterbuch der Deutschen Adverbien*. ドイツ語副詞辞典』白水社 1998.
- 岩崎英二郎『ドイツ語の副詞・心態詞研究——読解力の向上を求めて——』上巻 同友社 2012.
- LGDaF *Langenscheidt Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache*. Berlin/München/Wien/Türich/New York: Langenscheidt, 2003.
- 中右実『認知意味論の原理』大修館書店 1994.
- 岡本順治「心態詞の意味とは何か——『心の理論』との関係を問う——」(『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第14号 2010. pp. 51-77.)
- Rinas, K. *Die Abtönungspartikeln doch und ja. Semantik, Idiomatisierung, Kombinationen, tschechische Äquivalente*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2006.
- Rinas, K. “Bekanntheit? Begründung? Einigkeit? Zur semantischen Analyse der Abtönungspartikel *ja*”, In: *Deutsch als Fremdsprache*. 44, 2007. pp. 205-211.
- Rizzi, L. “The fine structure of the left periphery”, In: Haegeman, L. (eds.) *Elements of Grammar*. Dordrecht/Boston/London. 1997. pp. 281-337.
- 三瓶愼一「心態詞——生きた会話をつくり出す小さな言葉——」(『基礎ドイツ語』第4号8月号 1997. pp. 17-19.)
- Zimmermann, M. “Zum Wohl: Diskurspartikeln als Satztypmodifikatoren”, In: *Linguistische Berichte* 199, 2004. pp. 253-286.

